熊本大学教育学部紀要，人文科学
第44号，1—16，

熊本県内における自然地名の分布について

規工川　宏　輔

A Study of Geographical Place Names in Kumamoto Prefecture, Kyushu

Kosuke KIKUKAWA

(Received September 4, 1995)

はじめに

地名は，民俗学，言語学，歴史学，地理学をはじめ多くの分野で研究の対象とされ，そのアプローチの方法もそれぞれ異なっている．筆者にとっての地名研究は，地名の語義呼称の由来について考証することが目的ではなく，地理学の立場から，地名を個々の名称として取り上げるよりも，一つのセットとしてその分布状態をとらえ，その地域性いわば「地名相」なるものを考察することにある．このような観点から，本研究は柳田国男[1]，鏡味完二[2a,2b]，山口恵一郎[3a,3b]，松尾俊郎[4]，鏡味明克[5]，椙村大彬[6]，谷川健一[7]，千葉徳爾[8]など，先学による多くの研究成果をもとに，熊本県内における小字地名のうちとくに自然地名を対象にその分布を明らかにしようと試みたものである．

いうまでもなく，地理学での地名研究は，まず第一に小地名の分布を面的に把握することが不可欠である．このためには地形図に記載されている地名のみでは不十分であり，小字名，小字の区域図での検討が必要となる．本研究にあたっては，まず『角川日本地名大辞典 熊本県』の資料編[9]に収録されている県内全域の小字名，総数約4万8000の中から対象となる地名を抽出し，分類整理を行った．さらに，明治初期に編纂された『郡村誌』および『郡村図』，字切図などの古図，および市町村で公的に使用されている小字一覧図などによって小字名を補足するとともに，可能な限り小字区域の確認につとめた．

本稿では，熊本県内の自然地名のうち，とくに地形，水に関する地名を選び，これを21項目に分け，その分布について若干の考察を行った．

I　山地の地形と地名

a.「オバネ」（尾羽根・尾刎）

山地の高いところは，平坦な渓谷部に比べてくらしの中でのかかわりの少ないところであるから，その場所の自然的性質，すなわち地形，地質，植生，気象などによって名付けられるのが一般的である．立ち入ることのほとんどなかった官山，奥地林などでは国有林の呼称のほかに行政上の地名が全くないか，またあっても一つの小字名がきわめて広域にわたっているところが多い．

「オバネ」は，山地の尾根にあたる部分をさしており，『広辞苑』によると尾羽根は「鳥類の尾の羽根．静岡県，九州地方で嶺の連なり」とある．この地名は下記の通り県北部なかでも阿蘇・

菊池地方の外輪山麓に多い．

玉名郡南関町久重（中尾刎）．天水町（同）．菊池市亘（同）．菊池郡七城町水次（同）．旭志村麓（同）．大津町杉水（中尾刎・沖尾刎），矢護川（一ノ尾～七ノ尾，一尾刎～五尾刎）．阿蘇郡阿蘇町永草（長尾羽根・羽根）．小国町北里（中尾羽根）．蘇陽町上差尾（下尾刎・中尾刎）．白水村白川（長尾羽根）．西原村小森（中尾刎）．上益城郡益城町島田（大羽根）．御船町田代（尾場根）．宇土郡三角町郡浦（中尾羽根）．

阿蘇外輪山の西麓には，鞍岳から西方にのびる尾根筋に中尾刎(旭志村)，その南に続く矢護山西斜面（大津町側）の尾根と谷には一尾刎，一南迫，二南迫，二尾刎，一ノ迫，二ノ迫，三尾刎，三南迫，四南迫，四尾刎，五尾刎，三ノ迫と続き，さらに一ノ尾から七ノ尾の小字に区切られている．

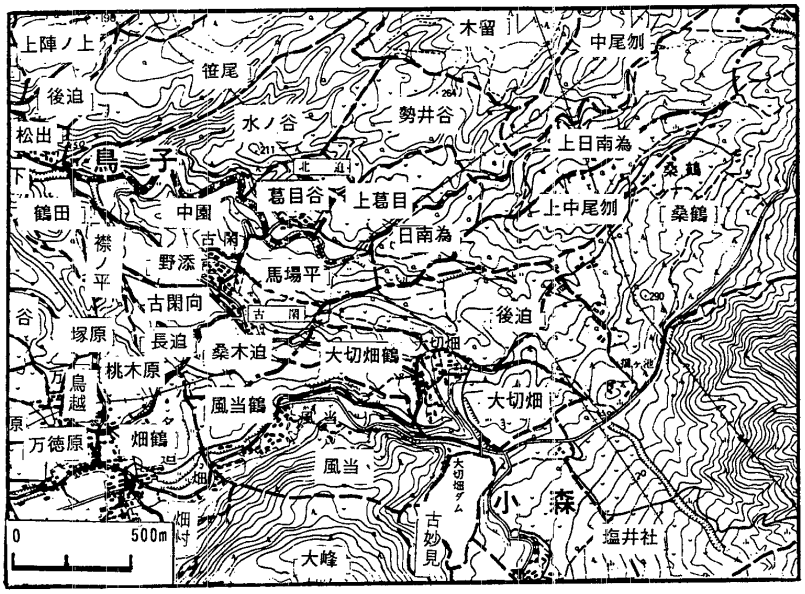

図1　阿蘇外輪山西麓，大峰山付近の字図（阿蘇郡西原村鳥子・小森）
山麓の尾根に「中尾刎」と「上中尾刎」，南向きの斜面には「日南為」の字名が付く，「塩井社」，「桑鶴」などの「ツル」地名は湧水地の多いことを示す．一帯は外輪山から吹き下ろす東風（マツボリ風）が強く，「風当」の字名がある．　（西原村役場の「字名一覧図」により作成）

小国町の中尾羽根は，九重連山の一目山の西麓，山内川野川と樅木川に挟まれた長い尾根筋の末端部に位置し，尾根筋の南麓には谷沿いに小南平，南平の集落が立地する．「中尾刎」，「中尾羽根」は「長尾刎」の転化したものであろう．

b.「トリゴエ」（鳥越）

「トリゴエ」地名は低い山地の鞍部をさし，峠の名称となっているところが多い．「トリゴエ」は尾根のなかで決まって鳥の群れの通過する低くなったところの地名とされている[10]．そこは多くが古くから山越えの道として利用されてきた鞍部であり，村人の日常生活と密接にかかわってきたところでもある．県内での「トリゴエ」の分布をみると，県北（玉名・鹿本・菊池・熊本市）15，阿蘇7，県南（宇城・上益城・八代・芦北）19，球磨4，天草30となっており，とくに天草地方に目立っている．

天草地方における「トリゴエ」地名の分布は下記の通りである．

本渡市本渡甲（鳥越），下浦（同），楠浦（同），宮地岳（同）．牛深市久玉町（同），二浦町（同），魚貫町（鳥越・福津鳥越）．松島町内野河内（鳥越）．有明町赤崎（鳥越峠・鳥越），上津浦（鳥越）．倉岳町浦（同）．御所浦町（鳥越・鳥峠・大通越）．新和町大田尾（鳥越），小宮地（同）．苓北町志岐（下鳥越・中鳥越），上津深江（鳥越）．天草町下田北（同）．河浦町立原（鳥越・船倉鳥越），新合（鳥越），今田（東鳥越・鳥越・大鳥越），今富（鳥越），崎津（同）．

八代地方と球磨郡五木地方を結ぶ大通峠（780m）は，南北朝時代，懐良親王の軍が通った「お通り越」に由来するという伝承があるが，大鳥越の転化したものとも思われる．ちなみに天草郡御所浦町の小字名に大通越がある．

c.「セメ」（責・瀬目）

「セメ」は谷の狭いところをさす地形語であり[11]，『広辞苑』によると「迫む・逼む，狭（せ）しと同源」とある．「セメ」地名は，下記の通りほとんど九州山地に分布している．

八代郡坂本村鎌瀬（責），市ノ俣（責谷），久多良木（責），鮎帰（上責）．泉村柿迫（セメ），仁田尾（攻）．葦北郡芦北町白谷（責迫），松生（責）．球磨郡山江村山田（責滝）．五木村（北瀬目・南瀬目・瀬目）．天草郡五和町鬼池（責迫），二江（責迫）．

このうち八代郡坂本村市ノ俣の責谷は，球磨川支流市ノ俣川の最上流部，山江村に至る水無越の谷間(中津道小市ノ俣分校付近)，同村鎌瀬の責は，球磨川右岸ＪＲ肥薩線鎌瀬駅から小川谷を溯った谷間に位置する．鮎帰の責境（通称地名 責）は，球磨川支流油谷川に設置されている油谷ダムの上流側にあたり，鮎帰責分校がある．また，同村久多良木の責は，球磨川支流百済木川と，葦北郡佐敷町側の佐敷谷を結ぶ狭隘部にあたる．五木村の瀬目は，村の南端，川辺川支流の瀬目谷沿いにあり同名の集落が立地する．

d.「ダン」（段）

「ダン」には平頂の山の意もあるが，段丘，台地に付けられている場合が多い．県内では，前記の「セメ」と同じく九州山地に多くみられ[11]，下記の通り八代郡坂本村には10か所にものぼる．

玉名郡玉東町木葉（段）．鹿本郡菊鹿町下内田（段）．上益城郡赤井（段）．下益城郡松橋町浦川内（段平）．八代郡竜北町高塚（段）．八代市二見本町（段）．坂本村西部（段・上段），中谷（段ノ平），鮎帰（荒段），葉木（段・段尻），鎌瀬（段山），鶴喰（真萱段・段ノ迫），市ノ俣（段平）．葦北郡芦北町市野瀬（上ノ段）．水俣市古里（段平）．人吉市中神（段ノ下・上ノ段・段）．球磨郡湯前町（上ノ段）．山江村山田（段ノ平），万江（上ノ段）．球磨村神瀬（上ノ段・段）．

球磨川流域では小規模の段丘が各所にみられ[12]，そこには集落が立地するなど平坦地の少ない山間地にとって重要な生活空間となっている．坂本村葉木の段は右岸の藤本小学校西側，同村鎌瀬の段山は同じく右岸ＪＲ肥薩線鎌瀬駅近くに位置している（図2）．ともに段丘と関連する代表的な「ダン」地名の事例といえる．同村西部の段・上段は，本流の右岸（小川小学校付近）にあり，ＪＲ肥薩線の駅名（段駅）ともなっているが，段丘はむしろ対岸の今泉側によく発達する．人吉盆地西縁部，人吉市中神町の段丘には，段ノ下・上ノ段・段の地名が付いている．八代市の南部，二見川流域にも段丘が各地に発達しており，二見本町に段の小字がある．

e.「ヒラ」（平）

「ヒラ」は，一般には山間地でやや傾斜のゆるい場所とか小平坦地にみられる地形語であり，全国各地に分布する[13]．起伏凹凸に富む山地に平地を意味する地名が多いのは，小さな平地でも目につきやすく，周囲との区別に適しており，また限られた耕地の利用にもっとも大切な場所となる

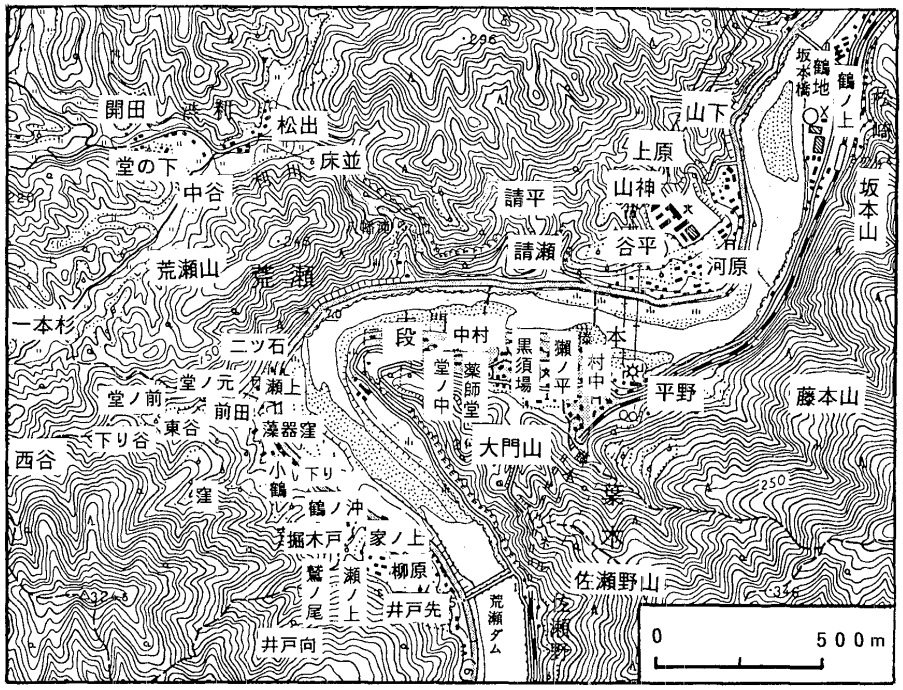

図2　九州山地，球磨川流域における小字の分布（八代郡坂本村荒瀬・坂本・葉木）
球磨川の河谷を中心に多くの小字があり，右岸の段丘面には「段」の地名が付く．
（坂本村役場「字名一覧図」により作成，国土地理院2万5千分1地形図「坂本」を使用）

からである．それは，あたかも低地に散在する自然堤防などの微高地と相似した関係を示している[14]．

「ヒラ」地名は，県内各地に数多く分布しているが，なかでも九州山地，天草地方に目立っている．九州山地の場合，人吉盆地の沖積低地を縁取る扇状地および台地に開拓地（墾（ハル））を意味する「ハラ」「ハル」地名が卓越するのに対して，山間地には「ヒラ」「ビラ」の付く地名が多く，球磨郡球磨村では54，八代郡坂本村では42を数える．

しかし，これらの位置を字図で詳細にみると，平坦地というよりもむしろ傾斜面を意味する場合がかなりあることがわかる．「ヒラ」は建築用語として切妻屋根の両方の流（斜面）を意味しており，傾斜面をいう地形語と共通する語ともみられている．この点に関して松尾[15]は「九州の山地，ことに球磨川上流の山地などには，全く平地のない険しい峡谷や山腹急斜面に何平と呼ぶ小集落が散在し，これらの平は斜面または崖地とみるのが至当であろう」と述べている．

「ヒラ」は，「コバ」（木場），「カワチ」（河内）などとともに天草地方に目立つ地名の一つである．下島のほぼ中央部に位置する本渡市枦宇土地区の場合，小字総数406のうち「ヒラ」地名が78にものぼっている．このほか地形に関連がある地名として「サコ」（迫）43，「カシラ」（頭）16，「シリ」（尻）12，「コシ」（越）6，「クボ」（久保）4があげられ，地形に関連した地名が小字総数の約4割（合計159）を占めていることがわかる．これらの地名は，その地形的特色にしたがって対比的に付けられているところが多く，山浦・山浦平，久々山・久々山平，京手・京手平，豆木場・豆木場平，ニガキ・ニガキ平・ニガキ越，ソウズ・ソウズ平・ソウズ頭，草ノ河内・草ノ迫・草ノ平・草ノ谷平，ヲリ尾迫・ヲリ尾尻・ヲリ尾頭・ヲリ尾平，柳田・柳田迫・柳田頭・柳田平のように対をなして隣接しているところが数多くみられる（図3）．このうちの「ヒラ」は，谷間を意味する「サコ」に隣接する背後の緩やかな山地斜面に付けられている．

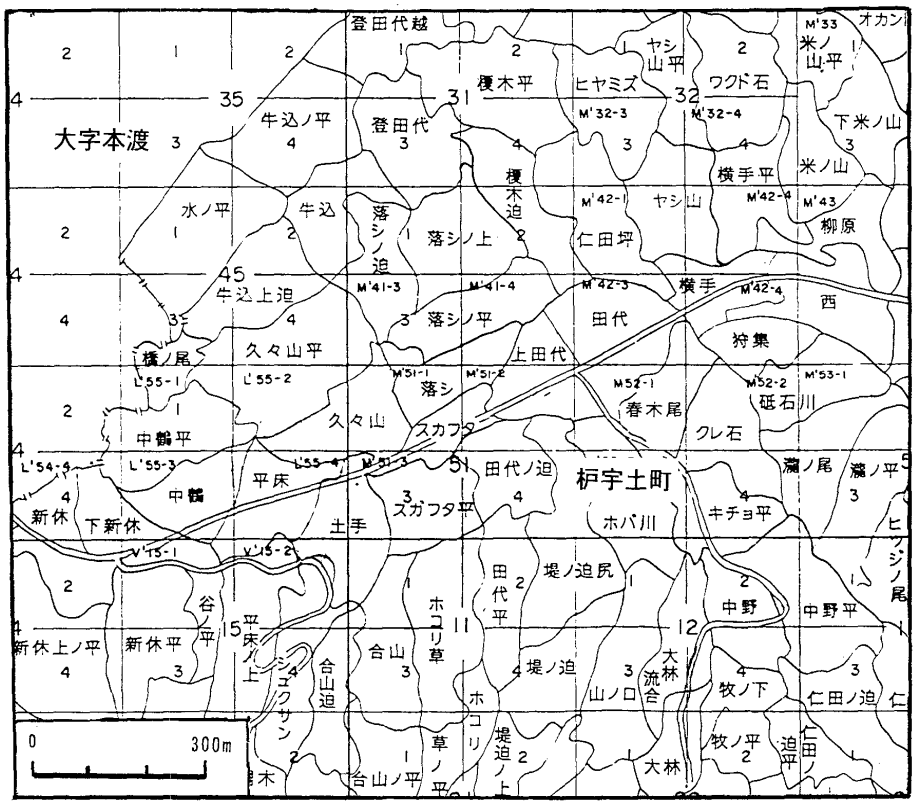

図3　天草下島中央部，本渡市枦宇土地区の字図
亀川ダム東部一帯の中山間地で，谷沿いに国道266号東西に通る．「落シ」・「落シノ平」・「落シノ上」・「落シノ迫」（図の中央），「合山」・「合山ノ平」・「合山迫」（図の南西）など，対をなす地形地名が目立つ．　（本渡市役所「字名一覧図」の一部を縮小）

一方，「ヒラ」には『広辞苑』によると「ほとり」の意味もある．北平（上益城郡益城町福原．御船町滝尾．宇土市宮庄，赤瀬），南平（鹿本郡植木町正清．上益城郡益城町小池．下益城郡砥用町甲佐平）のように，地形そのものよりも集落などに対する位置関係，さらに日平（上益城郡益城町砥川．御船町木倉．矢部町猿渡．下益城郡砥用町名越谷），日添平（葦北郡芦北町宮崎，米田．水俣市久木野）など気候環境を示している場合もある．

II　崖を意味する地名

a.「クエ・ツエ」（崩・杖）　崖を意味する地形地名は全国的にみてもきわめて多く，呼び名も地方によりさまざまである．これらは災害地名でもある．熊本の方言で崩れることを「クエル」といい，「ツエ」（潰える）と同語根とされている．「クエ」地名は中部地方以西，ことに中国，四国，九州に多いといわれており[16]，県内の崖に関する地名の中でももっとも多い．球磨地方では岨と書いてクエあるいはガケと読ませるところもある．

「クエ」地名は下記の通り県内全域に分布しているが，とくに天草，球磨地方に多い．

荒尾市川登（辰崩）．玉名市寺田（同），箱谷（崩田）．玉名郡菊水町瀬川（辰崩），米渡尾（崩迫）．長洲町清源寺（崩崎）．山鹿市小坂（崩ノ下）．鹿本郡植木町山本（崩平）．菊池市原（崩ノ迫・上崩ノ迫）．菊

池郡旭志村弁利（辰崩）．阿蘇郡一宮町荻の草（蛇崩原）．阿蘇町西湯浦（崩口），的石（崩引・上崩引）．南小国町満願寺（崩山・蛇崩・崩迫）．白水村両併（崩ノ戸）．久木野村河陰（崩の内）．上益城郡御船町豊秋（崩口），上滝（同）．益城町小谷（辰崩）．矢部町入佐（同）．下益城郡城南町（同）．松橋町浦川内（小崩）．豊野村（大崩）．砥用町越谷（崩の谷），早楠（大崩），大井早（崩平），川越（大崩）．八代郡東陽村北（崩岩），小浦（崩平），河俣（崩）．水俣市市渡瀬（崩平），久木野（同）．葦北郡田浦町小田浦（崩ノ迫・崩ノ本）．芦北町市之瀬（白崩），湯浦（崩平），天月（崩下），塩浸（崩平），大尼田（崩谷）．

「クワ」も「クエ」と同じく崖を意味する地形語である．「クワヅル」（桑鶴）は崖下の川沿いの土地を意味し，阿蘇郡小国町下城，白水村白川，八代郡坂本村深水，人吉市下永野，本渡市宮地岳，天草郡河浦町久留などをはじめ，県内各地に分布する

b.「ハナタテ」（花立）

「ハナタテ」は，前述の「クエ」とともに崖を意味する地形語である．「ハナ」は阿蘇北外輪の遠見ケ鼻（大観峰），卯ノ鼻，妻子ケ鼻などの名でも親しまれている突出部であり，「タテ」は直立を意味する．「ハナタテ」地名は，下記の通り県内の全域に分布する．

玉名郡三加和町上板楠（花立）．鹿本郡植木町舞尾（同）．菊池市下河原（同）．菊池郡菊陽町津久礼（同）．西合志町須屋（花立浦）．熊本市楡ノ木（花立境），上松尾（花立），河内（華立），阿蘇郡一の宮町荻の草（花立石）．長陽村長野（花立）．蘇陽町滝上（花立谷），米迫（花立），八木（同），柏（同）．上益城郡御船町高木（上・下花立）．益城町広崎（花立）．宇土郡不知火町浦上（花建）．下益城郡松橋町古保山（花立）．城南町鰐瀬（同），陳内（同）．砥用町三加（同）．八代郡東陽村南（同）．坂本村中谷（同）．水俣市袋（花立）．葦北郡芦北町（花立・花立平）．人吉市七池町（花立）．球磨郡錦町西（同）．水上村（同）．球磨村三ケ滝（同）．多良木町（同 国有林名）．天草郡大矢野町維和（同）．五和町井手（花建）．天草町下田南（同）．河浦町今富（同）．

このうち，菊陽町の花立は，熊本市・西合志町と接する台地上の低位段丘面に位置する．花立の地名はこれらの谷を縁取る比高約5mの段丘崖によるものであろう．隣接する熊本市楡ノ木には花立境，西合志町須屋は花立浦の小字名となっている．

熊本市の南東部にも花立・北花立の字名がある．古くは上益城郡沼山津村に属していたところで，現在は花立1～4丁目，健軍の字北花立として残っており，東部に隣接する益城町広崎にも花立の小字名がある．一帯は，前述の菊陽町津久礼の場合ほど明瞭ではないが，異なる段丘面の境にあたっており，段丘崖に関連して付けられた地名とみられる．

熊本市河内町の花立は，金峰山の西麓，「肥後耶馬渓」と称される金峰火山の火口瀬に近い山地の急斜面にあって，河内川に沿い上流側に平，鼓ケ滝，鮎帰の小字が隣接する．また，同じく金峰山の南麓，熊本市上松尾の花立も中松尾と上松尾を結ぶ狭隘部の急斜面に位置する．

蘇陽峡で知られる阿蘇郡蘇陽町には，花立の小字名が4か所あり，滝下，障子岩および大字名の長崎，花上，滝上などとともに一帯の地形の特徴をよく示している．長陽村の花立は烏帽子岳の西斜面にあたり，阿蘇登山道を示す嶽大道の小字が垂玉川に沿って隣接する．

球磨郡水上村江代の花立は，江代山の南，市房ダムより湯山川沿いに湯山峠に至る道路沿いの急斜面一帯に位置する．

c.「ホゲ・ウゲ・ウッポギ」（穿・打棒木・宇津保木）

断崖や山腹の険しい所を古語でホキ（仏木・堀切）といい，吉野川が四国山地を横切るところに発達した大歩危（オオボケ）・小歩危（コボケ）の峡谷は，「ホゲ」地名の好例としてあげられる[17]．熊本では穴があくことを「ホゲル」といい，さらに穴をあける意味に「ウッポグ」という独特の方言がある．この「ウッポグ」の地名には人為的な地形も含んでいるものと思われる．県内では「ホゲ・ウゲ・ウ

チホギ」に関する小字名として，下記の事例をあげることができる．

玉名市伊倉南方（上・下打穿）．阿蘇郡長陽村河陽（打保儀）．産山村大利（上・下宇都保木）．蘇陽町塩原（打棒木），菅尾（宇津保木）．上益城郡清和村緑川（穿ノ前・穿戸ノ原）．球磨郡球磨村神瀬（舞穿）．本渡市楠浦（穿平・前穿）．

このなかには河川による浸食地形のほか，カルスト地形の窪地(ドリーネ)，鍾乳洞も含まれている．球磨村の舞穿は，球磨川支流中園川の上流，横井集落の北方にある。秋払山，杣の鼻山の間のカルスト台地の窪地にちなむ地名であり，秋払山の東側には地窪の小字もある．また，清和村の穿ノ前・穿戸ノ原は，緑川緑川最上流部の集落内口近くにあり，緑川の谷底にある穿ノ洞と称する鍾乳洞と関連する地名である．

d.「ハケ・ホキ」　(葉木・保木)

「ハケ」「ハキ」は，東日本とくに武蔵野を中心にもっとも多く分布する崖地名として知られている[18]．九州山地の球磨村渡には白羽毛と称する小字がある．八代郡坂本村大字葉木は，ＪＲ肥薩線葉木駅のある球磨川右岸の渓谷沿いに位置しており，明治初期の合併により川内村となるまで破木村と称していたところである．その対岸，百済木川が球磨川本流に注ぐ位置にも破木と称する集落（大字川岳）があり，破木田の小字（大字田上）もある．

五家荘の１村として知られる八代郡泉村の大字葉木ハギは，『肥後国誌』所収の貞享５年天草御郡代官調書に「破木村」と記されている．当地を南流する葉木川（大小屋谷）と樅木川（さかいの谷川）との合流点一帯は吐合と呼ばれている．この場合の「ハキ」は，後述のように崖の意味よりも，文字通り水が吐け合うという合流点を示す地名である．

「ホキ」も「ハケ」と同系統の地名とされている．保木ノ本（阿蘇郡小国町上田），保木ノ上（熊本市上南部），ホキの下（熊本市山室）．保木（八代郡坂本村西部）など，その好例であろう．

また，九重連山の涌蓋山西麓に位置する峐ノ湯温泉（阿蘇郡小国町西里）の「ハゲ」も，「ホキ・ハケ・ホキ」と同類の崖地名として，その代表的な事例としてあげられる．天草下島南端の牛深市魚貫町にも大ハゲと称する小字名がある．

e.「ザレ」(座連・砂礫)

「ザレ」は頽岩崩土の急斜面や断崖に使われる地名で，「ザリ・ジャリ」に通ずるものとされている．蛇のつく山や谷あるいは「蛇喰」などの地名には崖地が多いが，これも「ザレ・ザリ」にあたるものとされている[19]．「ザレ」地名として，県内では下記のような事例をあげることができる．いずれも山間地の河谷に位置する．

玉名郡天水町小天（座連）．上益城郡矢部町荒谷（ザレ）．八代郡東陽村河俣（座連口・座連）．球磨郡球磨村神瀬（左座連・砂礫），渡（佐連）．山江村山田（ザレ谷）．

「ザレ」と同類の地形地名として「転石」(熊本市河内町，矢部町白小野，天草町大江)，「礫石」(阿蘇郡阿蘇町乙姫）の小字名がある．

f.「ウト」(宇土)

「ウト」は峠道や狭い谷合いの薬研式狭隘，両側が急な凹地によく付けられる地名である．これらの場所には地形上，崖を伴う場合が多く，「ウト」も崖を意味する地名の一つに含められている．県内で「ウト」の付く小字名は118を数え，各地に分布しているが，なかでも阿蘇・県南・天草地方に多く，県北・球磨地方には比較的少ない．

なお，「ウト」には谷，凹地のほかに連峰，鈍頂の山や丘，崖など，洞窟などの意味があるといわれており[20]，宇土半島の「ウト」も，その山並みに由来するものと思われる．

III 沖積低地および海辺の地名

a.「フケ」（湫・婦毛・福毛・不毛・吹気・浮池），「ムタ」（牟田・無田）

熊本では湿田を「フカダ」（深田）と呼んでいるが，全国的には「フケ田」と呼ぶところがかなりあり，「フケ」という語が地名に残されている．柳田[21]は沼地，湿地を意味している地形語の一つにとりあげ，「クテという語があって湫の字を宛て，これを開けば田になるような湿地を意味している」と述べ，長湫（ナガクテ）（愛知県長久手町）をその事例にあげている．

「フケ」は「クテ」よりも広範囲にわたる地形語であるといわれ，熊本県内でも下記の通り各地に分布する．

荒尾市上井手（婦毛），上平山（大福毛・添福毛・中福毛・小福毛）．玉名市河崎（布毛）．鹿本郡鹿央町千田（湫）．菊池郡大津町（大字吹田）．七城町辺田（不毛）．阿蘇郡産山村（吹原）．熊本市城山上代（吹気・上吹気・下吹気），八分字（上大吹毛・下大吹気），孫代（大吹毛・下吹毛），川口（不毛・湫），銭塘（不毛）．上益城郡嘉島町下仲間（婦毛）．八代市植柳下町（湫），海士江町（湫）．八代郡鏡町鏡村（浮池）．千丁町吉王丸（大耄）・葦北郡芦北町大野（浮池）．本渡市食場（大フケ）．天草郡栖本町古江（中フケ）．

県内の水田地帯に多い「ムタ」（牟田）地名も，もともと湿地の意味であり転じて開発地をさすようになった．県内での「ムタ」地名は自然陸化の土地にみられ，近世以降の海面干拓地では「開」，「新地」の名で呼ばれている．

b.「ガタ」（潟）

「ガタ」は，一般には海面が陸化の過程をたどって浅い湖すなわち潟湖となったところに付いており，日本海側に多い地名である．「ガタ」が特定の地名として付いている以上，そこは自然陸化の過程で，かなり長期間にわたり潮の干満によって干潟が見え隠れしていた土地であろう．三角州先端部は，干潮時に露出する砂州の段階から，干潟が形成されマコモ・ヨシ・カヤ・などの植物が密生する段階を経て，小堤防が築かれて耕地化されるなど新しい土地利用へと進む[22]．これらの段階は単なる自然現象として進行するのではなく，むしろさまざまな場所と時代に対応した人間の営みの産物であることが多い．その意味で「ガタ」も，前述の「ムタ」と同じく開発地名の一つとみることもできる．

「ガタ」は，県内の主要平野についてみる限り，中世における干潟開発の際，その区域を明らかにするために付けられた地名であり[23]，近世の海面干拓の区域にはみられない．熊本平野の場合，中世の開発地と近世以降の干拓地との間に40か所にのぼる「ガタ」地名が南北約6.5kmにわたり白川沿岸から緑川沿岸にかけて帯状に連なっている（図4）．ここでの「ガタ」地名は，本潟・新潟・北潟・上潟・下潟などのように位置関係を示す単純な呼び名が多い．その所在地は次の通りである．

熊本市小島上（沓潟），小島下（本潟・北内潟・南内潟），中島（北潟・南中潟・南潟・古潟），中原（南潟・北潟・東潟・中潟），並建（内潟・潟・新潟・外潟），白石（北潟・北外潟・新潟・南潟・南外潟），無田口（五丁潟・西潟・浜口潟），銭塘（潟・西潟），内田（南潟・南中潟・南新潟・北新潟・北潟・北中潟），奥古閑（上潟・中潟・下潟）．宇土市走潟（走潟・二町潟），新開（新潟・中潟），笹原（潟開）．宇土

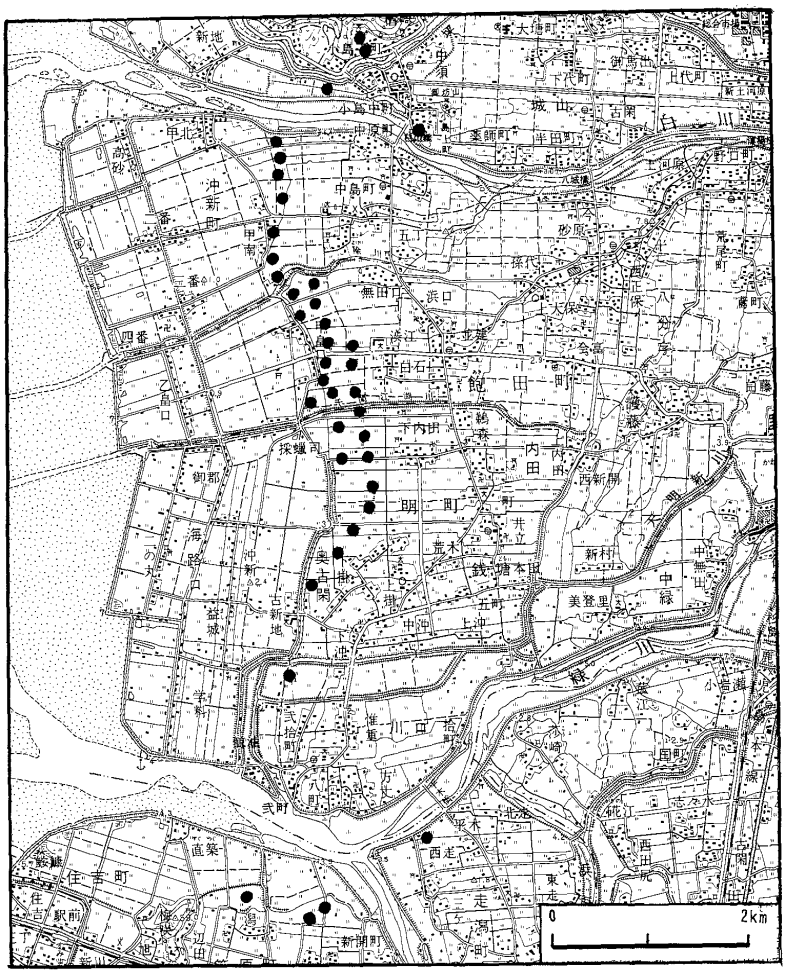

図4　熊本平野における「ガタ」地名の分布
（熊本市，旧飽託郡飽田町・天明町，宇土市の字図により作成）

郡三角町戸馳（内潟・内潟浦・内潟下）．

このほか，下記のところにも「ガタ」地名が分布する．

荒尾市牛水（平潟）．宇土郡不知火町長崎（千鳥潟）．下益城郡小川町南小野（新潟）．八代郡千丁町太牟田（下潟）．天草郡松島町今泉（大潟），阿村（中潟）．竜ケ岳町高戸（内潟）．栖本町古江（内潟）．新和町（前潟・下前潟・内潟）．河浦町久留（内潟）．

c.「カキワラ・カキゼ・カキエ」（硴原・硴瀬・硴江）

「カキ」地名はかつて干潟に発達していたカキ礁の存在を示しており，その多くが海面下にあった沖積低地に分布している．県内には「カキ」に関して下記の小字名および通称地名がある．

荒尾市菰屋（蛎原・上柿原）．玉名市滑石（硴原）．上益城郡嘉島町上六嘉（硴原）．宇土市花園町（硴塚）．下益城郡富合町大字（硴江）．松橋町南豊崎（硴原・硴本・硴江）．八代市上野町（硴塚），日奈久大坪町（北硴江・東硴江）．八代郡竜北町高塚（硴原）．鏡町貝洲（硴原）．千丁町古閑出（硴道）．葦北郡芦北町鶴木山（硴瀬）．天草郡松島町阿村（硴瀬）．

熊本平野の富合町大字硴江近くでは，浜戸川底より約4～5m下に汽水に棲息するシジミ，マガ

キの層が出ており，同平野における縄文海進時の海面を明らかにする手懸かりとなっている[24,25]．また嘉島町上六嘉の硴原はカキワラ貝塚で知られている．

八代平野の鏡町貝洲の硴原は，江戸時代の干拓によって陸化した七百町新地にあり，文政13年（1830）に貝洲・外出の2村が立村している．一帯の水田は，地名通りの貝洲からなる土壌条件も関連して，隣接するイグサ地帯に対して施設園芸中心の土地利用が卓越する．

d.「カマ」（釜），「ドウ」（洞）

全国各地の海岸や島のえぐられた崖や海食洞に釜，洞，窟の名が分布する．地形地名としての「カマ」には，滝，滝壷，淵，洞穴，小湾などの意味がある[26]．このほか，蔵王山の「御釜」のように火口湖を意味する場合もある．

県内での「カマ」の付く小字名をみると，炭釜床（スミガマドコ）（天草郡姫戸町姫浦），炭竈（スミガマ）（本渡市枦宇土）のように製炭を意味するものとみられる場合もあるが，多くが海辺の岩石海岸に分布しており，天草諸島の入り江に分布している．ここでの「カマ」は，釜のように湾入し小規模な干潟が発達しているという様子から生じた地形語とみられる．天草諸島の海辺に位置する「カマ」地名として，以下の小字名または集落がある．

大矢野町登立（野釜・鳩之釜）．松島町阿村（釜・釜ノ迫），合津（裏釜・釜・釜新田・志賀間），教良木（釜），今泉（御領釜）．有明町上津浦（釜ブタ），下津浦（釜），楠甫（釜），須子（釜蓋）．姫戸町姫浦（釜ノ迫・炭釜・元釜）．御所浦町（釜屋敷）．本渡市楠浦町（古釜・釜），本戸馬場（今釜），本町（釜平），広瀬（釜道）．新和町大宮地（先釜・中釜・釜・下釜・上釜・内釜）．五和町御領（釜ノ迫・新釜）．苓北町上津深江（釜ノ下），志岐（釜）．

天草では，江戸時代より小湾が各地で干拓の対象となっていたため，「カマ」地名は現在の海岸線からかなり入り込んだところにある場合が多い．このため，釜新田（松島町合津）のように干拓地の字名となっているところもある．しかし「カマ」は干拓地を意味するものではなく，干拓以前の湾入した地形語にちなむものである．

本渡市広瀬の釜道は，茂木根崎北部の湾入部から若干内陸に入った所にあるが，隣接して新田の小字があり河口部一帯は茂木根釜の名で呼ばれている．本渡市本戸馬場の今釜は広瀬川河口部の干拓地の字名であるが，現在は今釜町・今釜新町の市街地で官庁街となっている．

天草の中でも，とくに上島東北部に位置する松島町では，天草松島の名で知られる沈水海岸が発達し屈曲の多い海岸となっているため，かつて入り江であったところに多くの「カマ」の地名がある．また，下島東部の新和町は，干拓によって生じた水田が天草ではもっとも広く，大宮地川の河口部（大宮地）に釜・先釜・中釜・内釜・上釜・下釜の5小字が隣接する．いずれも湾入部に位置しており，このうち上釜・下釜は，延宝年間（17世紀後半）に築造された大宮地新田の小字名となっている．

「カマ」地名は，このほか宇土半島，芦北海岸の宇土郡不知火町永尾（西竈・東竈・北竈），水俣市大迫（釜戸）にも分布する．

上述の天草の「カマ」と同類の地形語として「ドウ」がある．金峰山の西麓，有明海に臨む熊本市松尾町上松尾から河内町白浜に至る海辺に竹洞（上松尾），梅洞（上松尾），鰐洞（河内町河内），鵜通洞ウツウドウ（同），民洞（同），民洞（河内町船津）の小字名がある．この場合の「ドウ」は洞窟の意ではなく，天草地方の「カマ」と同じくいずれも岩石海岸の湾入部にあたっていることから，近くの長崎鼻・仏崎などの岬端部に対する地形語であると思われる．このうち竹洞，梅洞の湾入部は干拓によって水田地帯となっている．

IV　川および湧水に関する地名

a.「トドロ・ドウドウ・．ドウメキ」（轟・道堂・動馬木）

水勢の音にちなむ「トドロ」，「トロロ」，「ドウドウ」，「ドウメキ」，「ボメキ」などの地名は全国的に数多く，さまざまな当て字がある．不動の滝で知られる等々力（トドロキ）（東京都世田谷区）などはその好例であって，多くが滝の所在地に関連している．したがって，下記のように県内にもこれに類する地名が各地に分布しており，ドウメキの滝（玉名市石貫），轟の滝（天草町下田北），栴檀轟の滝（泉村仁田尾）など滝の名称となっているところも多い．これらの地名は，とくに県南の緑川水系，球磨川水系，芦北海岸および天草地方に目立つ．

荒尾市上平山（轟），野原（轟），牛水（北・南道々）．玉名郡長洲町宮野（道堂）．岱明町高道（ボメキ）．天水町野部田（道米木）．菊水町用木（轟），瀬川（堂目木）．南関町上坂下（棒目木）．鹿本郡植木町大字轟．菊池郡合志町福原（堂免起）．阿蘇郡阿蘇町役犬原（東・中・西道目木）．南小国町満願寺（動馬木），中原（轟木）．小国町黒渕（雑目木）．波野村赤仁田（轟ノ上）．蘇陽町方ケ野（上・下轟），二瀬本（轟），長谷（轟）．上益城郡御船町木倉（堂免喜），七滝（轟），田代（轟・座女喜）．益城町福原（座免起）．甲佐町小鹿（登々呂）．矢部町城原（轟前田・轟口・轟屋敷），入佐（ドフメキ），原（ザメキ），川野（ザメキ）．清和村井無田（轟木・南轟木），緑川（轟谷），仮屋（轟越）．宇土市宮庄町（轟）．宇土郡三角町郡浦（道芽木）．八代郡坂本村田上（頭埋木（ツメキ）・轟），鮎帰（轟）．水俣市江添（ズメキ）．葦北郡田浦町横居木（上・中轟・轟）．芦北町国見（轟・泥泪（ドロメキ）），女島（上轟），黒岩（轟），伏木氏（留米木（ズメキ）），古石（登々路）．人吉市西間上（朴免木ボメキ），西大塚（豪ノ音・轟）．球磨郡多良木町槻木（轟ノ又）．水上村湯山（轟）．五木村（宮目木（グウメキ））山江村山田（コウメキ）．本渡市本渡甲（轟ノ迫），櫨宇土（轟・道目木），楠浦（轟河内），本（轟），宮地岳（轟ノ平・轟ノ山），佐伊津（登呂々）．天草郡松島町教良木（トドロ・トトロ川）．有明町赤崎（堂免木），大島子（動鳴山），新和町碇石（都々呂），大宮地（轟）．苓北町大字都呂々，都呂々（轟），富岡（轟一番割・轟二番割・轟三番割）．天草町下田北（轟），高浜（小轟・大轟・轟野），大江（都々呂）．河浦町宮野河内（轟），立原（轟），今田（轟・轟平）．

b.「アユガエリ」（鮎帰）

「アユガエリ」は滝によって鮎の遡上が妨げられるということから付いた地名である．前述の水勢の擬声語と同じく川の地形変換点を示す地名である．これは山道に付いている「駄帰」（菊池郡旭志村弁利），「駒帰（コマガエリ）峠」（阿蘇郡久木野村・上益城郡矢部町），「駒帰（コマガエリ）」（御船町滝尾），「馬帰（マガエシ）」（球磨郡湯前町）などと同類のものといえよう．

「アユガエリ」の地名を全国的にみると，2万5千分1地形図に記されている範囲では滝名，河川名を含め20か所あり[27]，いずれも和歌山県以西の西南日本に分布する．このうち県内では阿蘇南郷谷を流れる白川の「鮎帰の滝」（阿蘇郡長陽村・久木野村）と八代郡坂本村の大字名の2か所が含まれている．

このほか，県内では小字名として熊本市河内町河内（鮎帰），天草郡栖本町河内（鮎帰），有明町上津浦（鮎帰）などにその事例を見出すことができる．また，球磨郡球磨村神瀬，水上町江代では「魚帰」の小字名となっている．

坂本村の鮎帰は，文安5年（1448）の文書に「松隈・鮎皈」とみえ[28]，『肥後国誌』にも「鮎返」が小村としてあげられている．球磨川支流，油谷川の上流域に位置し油谷川とその支流日光（ニチコウ）川それぞれに滝が懸かっており，後者を瀬戸滝と称している．油谷川の滝の上流側には揚水式発電の油谷ダムがある．

熊本市の鮎帰は河内川に懸かる鼓ケ滝一帯の字名である．また，栖本町と有明町の鮎帰は河内

川の上流部にあって隣接する．球磨村の魚帰は球磨川支流川内川，水上町の魚帰は球磨川源流部にあたる魚帰川沿いに位置しており，ともに滝が懸かる．

字名にはないが，菊池川支流迫間川には鮎帰滝（菊池市豊間，迫間滝ともいう）が懸かり，古くからの名所となっている．『菊池郡誌』によると，嘉永年間，当時の河原手永総庄屋が石工に命じて左岸の石をうがち，鮎を遡上させることに成功したという．

c.「オチアイ・ハケアイ」（落合・吐合）

川の合流点は古くから交通上重要な位置を占めていたことから，これを意味する「オチアイ」（落合），「カワイ」（川合・河合・川会）などの地名が全国各地に分布する．

九州山地を流れる氷川とその支流栗木川との合流点は落合（八代郡泉村柿迫）と呼ばれ同村の中心部となっている．さらに溯ると岩奥川と横の手谷川の合流点に河合場（カヤバ）（同村柿迫）の集落があり，ともに県道の分岐点となっている．「オチアイ」の地名は阿蘇郡小国町北里，下益城郡西海東などにもみられるが，下記の通り，県内では「ハケアイ」「ハキアイ」「ハケヤ」と称する小字名が各地に分布する．

玉名市石貫（吐合（ハケヤ））．玉名郡長洲町清源寺（波華家（ハケヤ））．阿蘇郡白水村白川（吐合）．蘇陽町菅尾（吐ノ谷（ハキノタニ））．上益城郡嘉島町下六嘉（吐合（ハケアイ））．益城町砥川（同）．御船町田代（同）．矢部町白小野（同），葛原（同）．下益城郡小川町北海東（同）．砥用町甲佐平（咄合），坂貫（同）．中央町中（同）．八代郡泉村（吐合）．球磨郡球磨村一勝地（日添吐合・吐合）．水俣市久木野（吐合）．

玉名市の吐合は，繁根木川と小岱山より流下する山口川との合流点に位置し，谷を挟んで北側

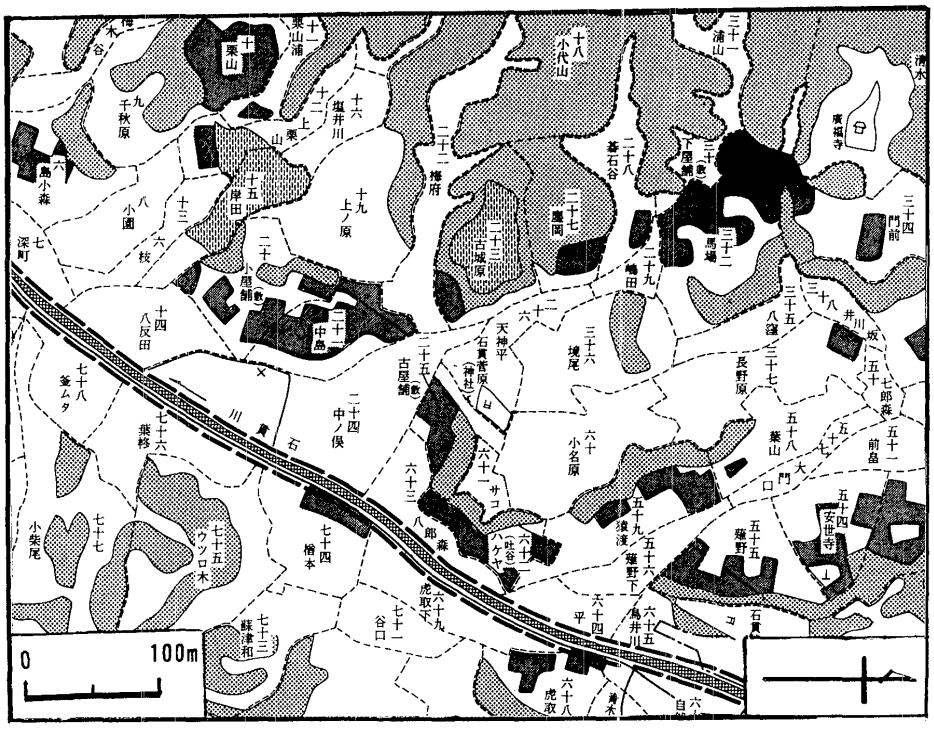

図5　小岱山東麓，旧石貫村の村図（玉名市石貫）図の中央，繁根木川（石貫川）と山口川（字雑野下・大門口）との合流点に「吐合（ハケヤ）」，小岱山麓に「塩井川」，川沿いの低地に「釜ムタ」，「深町」の小字がある．黒色部分は宅地，網目は山林を示す．
『玉名市史資料篇1絵図・地図』p. 133所収，明治初期の「玉名郡石貫村部分拡大図」（トレース図）の一部を縮小．

の薙野には阿蘇溶結凝灰岩の崖に彫られたナギノ横穴古墳群（国史跡）がある（図5）．嘉島町の吐合は，江津湖から流れ出す加勢川と秋津・木山・矢形川の合流点にあり，湛水の常習地帯ともなっている．砥用町甲佐平の咄合は筒川と緑川との合流点に位置，八代郡泉村の吐合は葉木川（大小屋谷）と樅木川との合流点に位置し，五家荘の葉木・樅木・椎原の3村を結ぶ道路の分岐点となっている．

球磨村一勝地の吐合・日添吐合は，球磨川支流の芋川沿いにあり，中津川との合流点にあたる．なお，吐合は南面する側にあって集落が立地，北向きとなる対岸を日添吐合と称している．球磨郡山江村の吐合は，村の西部を南流する万江川（球磨川支流）と宇那川との合流点にあたり，九州自動車道の沿線に位置する．

「ハケ」「ハキ」は，前述のように崖を意味する地名でもあるが，上記の場合はいずれも合流点を意味しており，崖地名とは区別すべきであろう．

d.「ツル」（鶴・津留）

水に関する地名は，地形地名と並んできわめて多く，それだけ水とのかかわりの大きいことを示している．このうち県内でもっとも多いのが「ツル」である．柳田[29]は「ガケの下の狭い流れの，簗などに便利な場所を意味しているらしい，全国に亙った用語のように思われる」と述べている．水流・鶴・津留・釣は水路，川沿いの低地を意味する地名とされており，宮崎県の場合，同県を特色づける地名型の筆頭にあげられている[30]．

熊本県内の「ツル」地名は，鶴・下鶴・桑鶴・西福鶴・小池鶴・南鶴・北鶴・桑鶴谷・車鶴（阿蘇郡白水村），桑鶴・鶴地・小鶴・江鶴・岩鶴・梅の木鶴（八代郡坂本村），上鶴・向鶴・小鶴・中鶴・下鶴（球磨郡錦町）など枚挙に遑がないほど多い．

上記の事例にみられるように，県内の「ツル」地名にはほとんど鶴の字があてられている．大分県では釣が多く，県境（阿蘇郡小国町西里）の麻生鶴に対し隣接する大分県玖珠町・九重町では麻生釣と書く．県内では鶴のほか津留も若干あり，玉名市，阿蘇郡高森町，上益城郡矢部町のように大字名となっているところもある．

e.「ソウズ・ショウズ・ショウブ・チョウズ」（清水・菖蒲・勝負・御手水）

清水は一般には「シミズ」と呼んでいるが，荒尾市蔵満字大清水（ショウズ），玉名郡玉東町白木字小清水（コソウズ）．鹿本郡植木町清水字小清水（コソウズ）のように「ソウズ」あるいは「ショウズ」と読ませるところがある．下記の小字名も上記の「ソウズ・ショウズ」にあたるものと思われる．

阿蘇郡長陽村河陽（小沢津）．蘇陽町長崎（ソヲズ）．下益城郡松橋町久具（早水（ソウズ））．中央町（大字大沢水（オオソウズ））．球磨郡岡原村宮原（惣頭）．本渡市櫨宇土（ソウズ・ソウズ平・ソウズ頭・上ソウズ・下ソウズ），天草郡松島町今泉（小僧都）．御所浦町（ソヲス），新和町大多尾（惣津・向惣津・惣津島），中田（惣津）．天草町高浜（大惣頭・上大惣頭）．

「ショウブ」も清水と関連する語とされており[31]，「菖蒲」「勝負」の付く小字名が下記の通り各地に分布する．

玉名郡南関町久重（菖蒲谷）．鹿本郡植木町色出（菖蒲川）．鹿北町岩野（勝負瀬）．菊池市重味（菖蒲谷）．阿蘇郡産山村田尻（上勝負田・勝負田）．蘇陽町今（勝負迫），長谷（勝負迫）．南小国町赤馬場（勝負迫），満願寺（菖蒲）．熊本市小島上（菖蒲谷・勝負谷）．上益城郡矢部町成君（勝負），下名連石（菖蒲ノ口）．下益城郡砥用町甲佐平（菖蒲ケ谷）．宇土郡不知火町永尾（勝負迫）．八代郡東陽村北（菖蒲）．坂本村鮎帰（菖蒲元）．泉村仁田尾（菖蒲谷）．人吉市下原田町（菖蒲・中菖蒲・下菖蒲）．水上町湯山（菖蒲元）．岡原村宮（しょうぶ谷）．天草郡大矢野町登立（菖蒲谷・南菖蒲谷）．栖本町馬場（菖蒲谷）．五和町

鬼池（勝負迫），井手（勝負平）．苓北町坂瀬川（菖蒲田）．天草町高浜（菖蒲谷）．河浦町今田（勝負ケ谷）．

「チョウズ」（御手洗・御手水）は細流・清水のほか，神社の近くで手を清める池や川の意味がある．いずれにせよ，水とかかわりのある地名であるが，三角町三角浦字御手洗のようにミタライと呼んでいるところでは，「ミタラシ」とともに後者の意味であろう．「チョウズ」地名として，県内では下記の事例があげられる．

阿蘇郡長陽村下野（下御手水・上御手水），白水村両併（中御手水・北御手水・上御手水・御手水（オテウズ）），宇土市松山（御手水）．宇土郡三角町三角浦（御手洗（ミタライ））．下益城郡小川町南小野（同）．水俣市長崎（御手洗水（オチヨウズミズ）谷（タニ））．本渡市広瀬（御手水）．天草郡松島町今泉（同），阿村（同）．苓北町坂瀬川（御手洗（オチヨウズ））．天草町高浜（同）．

f.「シオイ」（塩井）

「シオイ」に関してはいくつかの意味があるが[32,33]，神道では塩をもって祓清めの具または神饌とし，清浄潔斎に用い，祭場を浄めるために用いられている．柳田[34]は「塩雑談」のなかで九州地方ではこれを「御塩斎」とよび，長崎県平戸島で神前に供えるためにくみ取る海水を「シオイ」というと述べている．福岡の博多祇園山笠の祭事にも「お汐井取り」の行事がある．佐賀県富士町では神水川をシオイガワと読んでおり，千代田町には神水（シオイ）と称する旧村名がある．以上の事例からもうかがえるように，「シオイ」は祭典の祓に用いるための水をくむ泉あるいは川に関連しており，古代神事に関係があったものとみられる．

2万分1地形図に記載されている県内の「シオイ」地名は，阿蘇神社の神事と関係する阿蘇郡一の宮町宮地（塩井川）をはじめ，同町三野（塩井），小国町北里（塩井川）の3か所にすぎない．しかし小字名をみると，下記の通り阿蘇地方を中心に県内各地に分布していることがわかる．

荒尾市平井（塩井川）．玉名市石貫（塩井川）．玉名郡三加和町西吉地（塩井谷）．菊水町岩尻（塩井場），内田（塩井谷・西塩井谷），久井原（塩井谷）．玉東町上木葉（塩井谷）．山鹿市志々岐（塩井川）．鹿本郡菊鹿町木野（塩井川）．菊池市小木（上塩井谷）．菊池郡旭志村麓（塩井川）．阿蘇郡一の宮町宮地（塩井川），三野（塩井水神社）．小国町上田（汐井川），北里（塩井川）．蘇陽町（大字塩出迫）．高森町下切（塩井谷），河原（塩井原）．高森町高森（塩井社・塩井宮，高森町色見（塩井川水神）．白水村中松（塩井社），両併（塩井ノ水）．長陽村河陽（塩井ノ元）．西原村小森（塩井社）．上益城郡益城町杉堂（塩井神社）．清和村大平（塩井ノ本・塩井谷），鶴ケ田（汐出），郷野原（下塩井谷），貫原（塩井谷）．矢部町川野（塩井鶴）．下益城郡富合町木原（塩井川）．中央町坂本（汐井川）．豊野村中間（汐井川），安見（汐井川），砥用町境（塩井戸），豊富（塩井平）．葦北郡芦北町花岡（塩井田），白木（塩汲）．人吉市鬼木（塩井川）．天草郡松島町教良木（塩油川）．

「シオイ」地名は，湧水があって水神を祀っているところに多く分布する．したがって「シオイ」は必ずしも字名だけに限らず，湧水や小川の名称であったり，神社名だけの場合もある．球磨地方の「シオイ」地名は人吉市に1か所，天草地方も松島町教良木に塩油川の小字があるに過ぎない．球磨地方には祓川（ハライゴウ）（球磨郡多良木町黒肥地，水上村湯山）の小字名があり，「シオイ」と同類の地名と思われる．

以上のほか，湧水地の多い阿蘇地方では，関連した地名として「水口」（一の宮町宮地，高森町矢津田，小国町黒渕），「湧口（ワキクチ）」（阿蘇町黒川），「湧上（ワキアガリ）」（阿蘇町赤水），「湧沢津」（一の宮町宮地）などがある．

む す び

小字名は，地籍地名として行政上の登記関係には使われるが，住居表示については大字より小さい地名は不要であることから，日常一般にはなじみの薄いものとなっている．しかし，これらの小地名はもともとその土地に住んでいた人々のくらしと直接結び付いて生まれたものであり，その意味で地理学の分野にとって好個の研究対象であるといえる．

本稿では，熊本県内に分布する自然地名を，便宜的に山地，崖，沖積低地，海岸，河川，湧水に分け，それぞれ地域性のある地名を選んでその分布を明らかにした．その結果，いくつかの地名については地名群落なるものが認められ，地域的に卓越した分布を示していることが明らかとなった．例えば，阿蘇地方を中心に分布する「シオイ」地名，九州山地の「セメ」，「ダン」，天草地方の「カマ」地名など，県内の多様な自然的条件の差異を反映してかなり偏った分布を示している事例としてあげられよう．このようなある地域に卓越する地名は，県内における歴史的風土，文化圏の違いにも関連があるように思われる．地名には各地でさまざまな呼び方があるが，県内各地に分布する「ウツボギ」などは，熊本独特の方言地名といえよう．

県内の自然地名には，多様な自然的条件を反映して，このほかも日照，風，霜など気象・気候に関する地名，地質，土壌などに関する地名も少なくない．これらの地名については稿を改めて報告することにしたい．

付　　記

本研究を進めるにあたり，県内各地の市町村より小字一覧図など多くの資料を提供していただき，ご教示を賜った．記して謝意を表したい．本研究の一部は，第3回熊本地名研究会（1988年10月），全国地名シンポジウム八代大会（1990年8月），第9回熊本地名シンポジウム（1994年11月）で発表した．

注・参考文献

1）柳田国男（1936）：『地名の研究』，古今書院．
2a）鏡味完二（1958）：『日本地名学　上・下』，日本地名学研究所．
2b）鏡味完二（1964）：『日本の地名』，角川書店．
3a）山口恵一郎（1974）：『地図と地名』，古今書院．
3b）山口恵一郎（1987）：『地図に地名を探る』，古今書院．
4）松尾俊郎（1976）：『日本の地名』，新人物往来社．
5）鏡味完二・鏡味明克（1977）：『地名の語源』，角川書店．
6）椙村大彬（1978）：『地理名称の表現序説』，古今書院．
7）谷川健一編著（1979）：『現代「地名」考』，日本放送出版協会．
8）千葉徳爾（1994）：『新・地名の研究』新訂版，古今書院．
9）竹内理三編著（1987）：『角川日本地名大事典43 熊本県』，pp. 1581-1634
この字一覧は収集可能な資料を基礎として作成されており，したがって字切図など古い資料によったものもある．各資料の年代は一定ではない．

10) 前掲 5)，p. 140.
11) 前掲 4)，p. 160.　前掲 5)，p. 140.
12) 熊本県（1987)：土地分類基本調査「日奈久」．同（1990)：「佐敷・大口」．
13) 前掲 7)，p. 38.
14) 前掲 4)，p. 44.
15) 前掲 4)，p. 173.
16) 前掲 4)，p. 154.
17) 前掲 4)，p. 157．前掲 3a)，p. 25.
18) 前掲 4)，p. 157.
19) 前掲 4)，p. 161.
20) 前掲 5)，p. 86.
21) 前掲 1)，p. 87.
22) 尾留川正平（1952)：デルタ先端部の開拓過程の対比．地理学評論，25 巻 2 号．
23) 規工川宏輔（1989)：中世の海岸線を引く．第 3 回熊本地名研究会報告書，pp. 27-33.
24) 田村実・堀川治誠（1988)：熊本平野への縄文海進の地層．熊本大学教育学部紀要，第 37 号，pp. 19-37.
25) 田村実（1994)：熊本の地質と地名（パネル討論)．第 9 回熊本地名シンポジウム報告書，pp. 59-62.
26) 前掲 3a)，p. 24．前掲 4)，p. 160．前掲 5)，p. 97.
27) 金井弘夫編著（1993)：『新日本地名索引 第 1 巻』，アポック社，p. 63.
28) 松本雅明監修（1985)：『熊本県の地名』，平凡社，p. 718.
29) 前掲 1)，p. 142.
30) 前掲 5)，p. 134.
31) 前掲 5)，p. 120.
32) 松尾は「シオ」地名について「海岸なら別であるが，山地などにある塩沢，塩谷，塩津，塩瀬の類には塩に関係なく，「シボ」「シブ」と同じく狭い谷や谷口のような地形からきたものが多いのではないかと述べている（前掲 4，p. 64)．
33) 塩井は「塩分を採取する井（鉱泉・食塩泉)」の意味もあり，『肥後国求麻郡村誌』の湯前村の項に「潮山ニ池アリ 4 尺方也　水ニ塩気アリ　増減スルコト海潮ノ如シ　諸鳥集リテ塩水ヲ飲ム　永享年間潮神社ヲ建立ス　文久年中試ニコノ此水ヲ焼キ塩を取ル事アリ」と記されている．
34) 『柳田国男集 第 14 巻』所収，筑摩書房，p. 476.